

目が見えなかったり見えにくかったりする視覚障害のある人たちがプレーする競技「ブラインドサッカー」。ゴールキーパー（ＧＫ）以外は目かくしをして全く見えない状態でボールを取り合い、ゴールに向かってけります。札幌市内で開かれた大会を、こども記者2人が取材しました。（山田芳祥子）

ブラインドサッカー 音と声が頼り

こども記者見ぶん録

パス、ドリブル 目かくしてプレー

ブラインドサッカーは5人制。ゴールキーパー（ＧＫ）は見える人（晴眼者）か見えにくい弱視の人、それ以外のフィールドプレーヤー（ＦＰ）は視覚障害のある人で、国内試合では晴眼者も参加できます。ボールの中にある金属のシャラシャラという音とＧＫやゴール裏にいる「コーラー」の声でボールやゴール、他のプレーヤーの位置を知ります。

こども記者は江別市・江別第一小4年の本田悠さんと札幌市・三角山小6年の鎌田結楓さん。取材したのはＮＰＯ法人日本ブラインドサッカー協会（東京）が8月に開いた「北日本リーグ2026in札幌」で、札幌、帯広、仙台の3市のチームが出場しました。

屋内ピッチは縦約40メートル、横20メートル。サイドに高さ約1メートルのフェンスがあります。ＦＰにボールの音や声が聞こえるよう、観客は大きな声を出してはいけません。2人は緊張した表情で選手の動きを見つめました。

ボールを取りに行く選手は危険なぶつかり方をしないよう、うでを前に伸ばしスペイン語で「行く」という意味の「ボイ！」と声を出します。それでも他の選手やフェンスにぶつかり、ドンッと大きな音がひびきます。シュートが放たれると静かだった場内に「わーっ！」と歓声が上がりました。「こんなに激しいんだって、びっくりした。見えないのにゴールに向けてけることができて、すごい」と鎌田さん。

2人は試合の合間に、「ナマーラ北海道」（札幌）の選手の指導でブラインドサッカーを体験しました。14年にできた道内初のブラインドサッカーのチームです。

目かくしをして選手の呼ぶ声の方に歩くことから始め、小走り、パスと挑戦。ドリブルではボールを前にけってしまい、どこへ行ったか分からなくなる場面も。慣れると勢いよくシュートを打てるようになりました。本田さんは「ボールの音は聞こえるのに、足に当たらない。難しいけど楽しい」と笑顔でした。





㊤足達輝羅選手（左）からボールについて教わる鎌田結楓さん（中央）と本田悠さん。通常のサッカー用より一回り小さく、中に金属があり音が鳴ります（いずれも大石祐希撮影）

㊦ブラインドサッカーを体験する、こども記者たち

ぶつかるこわさ 練習で慣れ

ナマーラ北海道で、積極的に得点をねらう役割の「ゴールハンター」としてプレーする足達輝羅選手（22）＝小樽市在住＝に、こども記者の2人が疑問を聞きました。

◇

鎌田さん　ぶつかるのはこわくないですか。

足達さん　ブラインドサッカーを始めた時は、こわかったです。ボールの音が聞こえても取りに行けませんでした。ぼくは弱視で目かくしをして何かする経験がありませんでしたから。でも練習すればするほど慣れ、チームに入って4年目の今はこわくないです。

鎌田さん　私ならこわくて立ちつくしてしまいそうです。

本田さん　競技を始めたきっかけは何ですか。

足達さん　視覚障害がある人が通う北海道札幌視覚支援学校にいたのですが、小学6年の1年だけ普通（地域）の小学校に行き、サッカーを体験しました。他の人より見えないので難しかったけれど、楽しかったです。進学した支援学校の中・高等部にはサッカー部がなく、体育の先生がブラインドサッカーを教えてくれ、高等部3年から始めました。



足達選手（左）にインタビューし、疑問を聞きました

本田さん　視覚障害がある人のサッカーも学校も知らなくて、びっくりしました。いろいろなことを知れたし試合も面白かったです。